

異世界へ召喚されてしまった男性のハーレム世界期

機械天使

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界へと転生をしてしまった男性、荒井 博之（ひろゆき）は現世で死んでしまい神様転移で異世界へと行き、そのチート能力を使い異世界で生活をしていく。

エルフ、ドワーフ、獣人、悪魔、天人などがいる世界で彼、荒井博之はどう異世界で暮らしていくのか頑張るのであつた。

目 次

異世界へと	1
イスカンダル城へ	5
エルフを助ける	9
長老のお願い	16
山賊砦へ	23
洞窟へ	27
ラウル対グラエキス	31
勇者を見る	34
噂の場所へ	37
宿へ到着	43
ラウル対勇者。	46
水の街にいたモンスター。	49
アイルスの様子見	54
奴隸の街	58
罠だらけの洞窟	62

## 異世界へと

「・・・あの・・・」

声が聞こえてきた、その声は優しくて気持ちがいい声だ。まるで俺の心を満たしてくれるかのように。

「起きてください!!」

「どあああああああああああ!!」

あたりを見ると、そこは白い世界だった。まるで何もないかのように・・そして俺の目の前には大きなものが二つってあれ?なんでそれが目の前に。

俺は声をした方を見ると、涙目になつている女性がいた。

(ということ)は、俺が見ていたのは彼女の胸つてこと!落ち着け俺：自分の名前を言うんだ・・俺は荒井 博之、今年で35歳のおじさんだ、結婚もできずに独身の男だ。)

「えっと荒井さん落ち着いてくださいね、あなたは死んでしまったんですよ。」

「・・・は?」

今この人は何て言つた?死んだ?!いや待てよ・・俺は確かに最近は仕事で体を休ませる時間がなかつた。

「もしかして疲労で死んだとかですか?」

「半分は正解です、ですがあなたの場合は何て言えばいいのでしょうか・・あなたは帰る時に電車を待つっていたのじゃないですか?」

「・・・・・・・・・・・・

彼女の言葉に俺は考えていた、仕事を疲れで電車で帰ろうとしたときには・・そう俺は・・・

「・・・押されて電車に・・・轢かれたんだな。」

思い出した、疲れていて完全に後ろから押されたのに気づかずにそのまま電車に轢かれて人生終わつたんだな・・情けない最後だな。「だがなんで俺はここにいるんだ?死んだのだから天国か地獄へ行くかと思つたんだけど?」

俺はそう聞いたが、彼女は笑いながら答えてくれた。

「それはですね、あなたを異世界へ招待をしようと思いまして、あなたは死ぬ前などから人に頼られていましたね？その様子をずっと見ていたのですから。」

「あんまり誇れるほどじゃないけどな、俺はただやりたいことを思つただけだ。だから優しいとかじゃない。それだけは本当だ。まあ異世界なら普通に暮らしていきたいな。」

「はあ・・力などはいらないのですか？」

「ああ、俺はのんびりと暮らしていくのも悪くないなと思っている、力なんてね・・・」

彼はそういうながら目を閉じて準備をしてから異世界の扉の方へと歩いていくのであつた。

「・・・・・あの世界では力などが必要なんですね・・そうだ！！勝手にですがある人の記憶であつたのをさいげんさせてみたかったんですね？ついでにつと。」

彼女は転生をする彼にこつそりと力を託すのであつた、それがのちに彼の人生を大きく変えることになるとは誰も思わないのであつた。場所が変わり、博之は目を開ける。

「ここが・・異世界なんだな。さてステータス・・・は？」

彼は自身のステータスを見て驚いている、自分は普通に過ごしたいと思つていたのだが・・そのステータスが異常なのだ。

「チートじゃないか・・しかも想像をしたら武器が出てくるつて、あとは自分で武器を作つたり魔法を作つたりだと!?やはりこの世界は魔法があるのでな・・魔法か・・昔はよく遊んでいたな。懐かしいな・・・・」

彼は懐かしそうに手を出して火をイメージをすると小さい火の弾が出てきた、彼はそのまま大きくできるのかなと考えていると火の弾が大きくなつていき彼は困惑をしていた。

「どああああ!!解除!!」

彼が言うと火の弾が消えており、彼は驚きながらも魔法が使えると確信を得ていた。

「魔法が使えるなら武器とかどうしようかな・・銃とかいや銃剣みた

いなのがゲームでもあつたな。」

彼はそういうと手に現れたのはガンブレードみたいのが発生をした。

「ふあ!? ガンブレードみたいなのを想像をしたら出て来ちゃったよ・・・弾丸とかどうしよう・・・ん?」

博之はガンブレードを構えたまま走りだしてスピードが速く、自分でも驚いてる。

(まさか感覚などがすべて倍以上になつているとはな、先ほども遠くの人に人が見えていたし、声も聞こえていた。普通に暮らしたいと思つていたのに神様のバカあああああああああああああ!!)

走りながら神様に文句を言つてゐるが、彼は止まつて気配を消す。(あそこだな・・・お姫様みたいなのが一人におそらくメイドさんで会つているのだろうな、盗賊が6人ほどだな・・・)

彼は持つているガンブレードの銃の弾を確認をしてから気配を消したままブレードモードのガンブレードを構えて一人の盗賊を切りつけて次にガンモードに移行をして二人の盗賊を撃つた。

「てめえ・・・何もんだ!!」

「・・・ただの旅人ですけど? ただお前たちのような奴を許せないだけ・・・我が相手を切り裂け!! ウィンドカッター!!」

博之は風の魔法ウインドカッターを放ち盗賊たちを次々と首を駆つていき倒していく、彼は近づいてきた敵をガンブレードで切りつけていく。

敵を撃破した後、彼は辺りを見てガンブレードを見ていた。自身に返り血を浴びており自分が相手を切つたのだと感じていた。

(これはゲームでも何でもない・・・現実で起つてゐる。なんで俺は冷静になつてゐるんだ? 人などを殺したことがないのに。)

「あ・・・あの!!」

女性の声をしたので博之は向くと、おそらくプリンセスであろう女性が博之に声をかけてきた。

「なんでしょうか?」

「助けていただきありがとうございます!! 私はイスカンダル王国の

セレーヌ・アミュータといいます。私たちを助けていただいてありがとうございます。」

「・・・お気になさらずに、では俺はこれで。」

「お待ちください!!せめてお礼をさせてもらえませんか?」

彼は止まり考えるが、今はこの世界のことを知りたいと思い彼女の提案を受けることにした。

「わかりました、実はここに来たのは初めてなもので困っていたところでした。お願ひします。」

「はい!!えつとあなたは・・・」

(名前か・・・荒井 博之だとな。格好的に見てなかつたな・・・うーん)

彼は前の名前をここで使うべきか悩んだ結果、別の名前で彼女に教えることにした。

「俺はラウル・ラウル・ランページだ。」

こうして荒井 博之ことラウル・ランページの異世界での暮らしが今始まるのであつた。

## イスカンダル城へ

荒井 博之ことラウル・ランページはイスカンダル王国のお姫様セレーヌ・アミュータとメイドさんを助けて現在彼女が乗つっていた馬車に乗つてお城の方へと向かつている。

「ではラウルさまは遠い場所からこの場所へと?」

「ええ(まあ嘘は言つてないけどな。)そこで声が聞こえまして駆けつけたのであります。」

「まあでもお強いですね、ラウルさまは。」

「そうですか?」

「はい!!」

彼女は顔を赤くしながら言うが、彼はどうして彼女は顔を赤くしているのだろうかと思いながら馬車から街が見えてきた。

「ラウルさま、あれが私のお父様が収めておりますイスカンダル王国ですわ。」

(あれがイスカンダル王国・・・)

彼は彼女が門番に話をしているのを見てから門が開門されて中へ入る、そこにはたくさんの人たちが笑っている。

彼は見ながら辺りを確認をしている、どの国でもいろんな施設があるんだなつと。

「あれが私のお父様がおられる、イスカンダル城です!!」

「あれが・・・」

馬車が止まり、二人は降りると大臣らしい人物が慌てて走つてきた。

「お嬢様!!お父様が大変でござります!!」

「じい、落ち着いて!!お父様がどうしたの!!」

「は!!旦那様が毒を盛られたのでござります、命もあとわずかといわれております・・・およよよよ。」

(ここでまさかの毒殺かよ、待てよ・・・)「なあ、王様の毒は今も体に周つてているのか?」

「えつとあなたは?」

「俺はラウル・ランページです。」

「ラウルさまは私を助けてくださった方なんです。」

「これはお嬢様をお救いしてくださつてありがとうございます。」

「じいやさん!! すぐに王様のところへ案内をしてください!!」

「わかりました、こちらになります!!」

彼らは走りだして王様が眠っているであろうお部屋のところへと向かうのであつた。

ラウル side

俺はじいやさんに案内をしてもらい、到着をする。中へ入ると家族や部下であろう人たちがたくさんいた。

「じい!!」

「奥方様、マーヤさま。セレーヌさまがおかえりになりました。」

「セレーヌ!!」

「お母様。ただいま戻りました!!」

「セレーヌ、その人は?」

姉であろう、マーヤつて人が俺のこと気に気づいてほかの人たちも俺の方をじーっと見ている。

「あの方はラウル・ランページさま。盗賊に襲われていた私たちを助けてくれたのです!!」

「話は後で・・・」

俺は苦しんでいる王様の近くへと向かう、そして右手を前に出してある呪文を唱える。

「リカバリ―」

俺の手から光が発生をして、王様の体の中にある毒を順番に消していく。このリカバリ―は強力な分、俺の魔力の消耗を早めるのが欠点となっている。

これは課題として治すだけだな、おつと王様が目を見ましたみたいだ。

「・・・おお・・・先ほどまで苦しかった毒が抜けていく。」  
(ラウルさま・・・)

あれ? 気のせいかなセレーヌが俺をじーーーと見ている気がす

るのだが、王様が俺にお礼を言っている。

「娘を助けてくれただけじゃなく、私の毒も治してくれてありがとうございます。」

「私からもお礼を言わせてください、主人や娘を助けてくださつてありがとうございます。」

「いいえ、自分はただ助けたいと思つたから動いたのです。助かつて良かつたですよ。」

俺は本心を伝えてから、部屋を出ようとすると。

「おやラウルさまどこへ？」

「私は気ままな旅人です、だからそろそろ旅へ行こうかと。」

「待つてください!!」

「セレーヌさま?」

「セレーヌとお呼びくださいラウルさま……お父様!!お母様!!私決めました!!」

「ん? セレーヌが何かを決めたというが、一体何を決めたんだろうか。俺ははやく別の技などを「私ラウルさまのおくさんになりたいのです!!」

「ぶうううううううううううううううううううう!!」

今なんて言つた、まだ会つて一日の俺だぞ。

「ちょっと待つてくれ!!セレーヌさま、いきなり私の奥さんになりましたいというのはどういうことですか!?」

さすがの俺もこればかりはいきなりすぎるので理由を聞くしかなり、流石にいきなり王族の旦那になるのはな……

「その……ラウルさまはあの時、私を助けてくださいました。そのあともあなたはた父を助けてくださつた、私はあなたのその優しい心を見て来ました。だからあなたの奥さんになりたいのです!!」

「といわれてもな、俺はまだあなたのことを詳しく知らない……」

ちらつと俺は王様の方を見ている、彼もセレーヌと俺の方を交互に見てから目を開ける。

「そうだね、ならラウル君にはある一つの屋敷をあげよう、そこで娘のセレーヌと過ごしてはいかがかな?」

「…まあそれでいいのでしたら、俺も気ままな旅をしてきましたから。」

なんとか知らないが、異世界にて屋敷と奥さん？を手に入れることになった俺であつた。

ラウル slide 終了

屋敷を手に入れて数日がたつた、現在彼はセレーヌに案内をされて街の中を探索をしている。

「どうですか？ラウルさま。」

「ああいい街だな、なあセレーヌ…ほかにもこの世界の街などを知りたいと思う。」

「街ですか？確かに色々とありますが…」

「そうか、だが見てみたいものだな…俺は。」

「…ちよつとだけまつていてもらつてもよろしいですか？」

セレーヌは家へと戻つてから、ラウルは今のうち二右手を出していた。

「よーしこれでいつでもこの屋敷に帰つてこれるように設定をしておいた、この創成をして作ったこのミラーゲートを使えば、この屋敷にいつ出も戻つてこれるからな。」

彼は納得をしていると、セレーヌがバンと入ってきた。

「お父様から許可を得て来ました、馬車なども用意をさせておりますので、ラウルさま!!」

「そうか、なら明日出るとしよう、セレーヌは？」

「もちろんついていきますよ!!旦那様が行くところは私も共にですわ!!」

次の日に彼はセレーヌと一緒にイスカンダル王国を出て旅をするのであつた、

## エルフを助ける

ラウル side

現在俺たちは馬車に乗り旅をしていた、セレーヌがついてくるとは思つてもなかつたが、彼女は魔法などが得意というので俺は武器を考えていた。

(この世界にも剣のほかには槍、斧、弓、鞭などがあるが・・・ブームランなどはないみたいだな。銃などはガンブレードがあるからロケランなどは危険すぎるしパワーがあるからな。)

現在俺たちはイスカンダル王国から離れている場所へ到着をした、この森は初心者が来る場所でもあり魔物自体も弱いという。

セレーヌ曰く、冒険者などはここでレベルを上げてから先の街へと行くと言つていたのを思い出した。

(そういうえばモンスターと言つていたがどんなのがいるのだろうか、セレーヌに聞いてみるとするか。)「なあセレーヌ」

「何でしようか?」

「ここら辺に出てくるモンスターとはどういうのがいるのだい?」

「そうですね、一番弱いのでしたらスライムとか集団ならゴブリンにウルフなどですね。たまに空から鳥型モンスターのバードゴスが現れるぐらいですね。でもバードゴスはこの辺にはいませんから地上を警戒をしておけば大丈夫ですよ。特に気を付けないといけないのがゴブリンですね。」

「ゴブリンかい?」

「はい、奴らは集団の上ボスゴブリンなどはレベルが高いのです。これに襲われでもしたらおそらくですが全滅をする可能性があります。」

「なるほどな。」

俺はそう考えていると何かが現れたみたいだな、俺は創生の能力を使い武器を生成する。

そこには翼の柄がついた剣、間違いないこの武器は・・・  
(はやぶさの剣・・・二回行動が可能な武器だ。)

適当に剣と想像をしたらこの武器が完成をした、とりあえず俺は今までおれ自身に強化魔法をかけている。

現れたのは水色のプルプルしたものだが、これってファイナルファンタジーとかに出てくる方のスライムだな。

セレースも杖を持ち構えている、俺は突撃をしてスライムへ攻撃をする。スライムのボディは簡単に切れて撃破した。

「ファイアーボール!!」

杖から火の弾が発生をしてスライムへ攻撃をする、燃えていくスライムを見て改めて魔法はすごいなと思った。

俺は次に武器を生成をして構えている。

「ラウルさまその武器は?」

「まあみておきなつて。この武器は・・・こうなげるのさ!!」

俺は風の魔法で作りだしたブームランを投げる、名前を付けるとしたら疾風のブームラン・・つてあれ?これドラクエにもなかつたかな?

まあいいや、俺が投げた疾風のブームランがスライムたちに命中をして撃破する。俺たちはあたりを確認をして撃破したのを確認をして俺たちは武器を収める。

「やりましたね、ラウルさま。」

「ああそうだな・・・よつと。」

俺は戻ってきたブームランをキヤッチをしてしまおうとしたが一匹のスライムがいた。

「またスライムが!!」

「待てセレース。」

「ラウルさま?」

俺は膝についてスライムの方を見る、スライムはその体をプルプルしながら俺に近づいてきて手に触れる。

「ぐ!!」

「ラウルさま!？」

俺は左手に熱いのを感じてみると何かが刻まれているのが出てきた、なんだこれ?

「これは契約魔法?! このスライムはあなたを『主人として認めたことになります。』

「契約魔法・・・だからその証つてわけか。」

俺は膝をついているとスライムは嬉しそうに俺の肩に乗ってきた、せっかくの新しい仲間だからな名前を付けてあげないとな。

「そうだな、お前の名前は今日からスラツシユだ。よろしくなスラツシユ?」

『ぴきーーーー』

スラツシユが仲間に加わった。

こうして俺とセレーヌ、スライムのスラツシユが仲間に加わり、俺はスラツシユがどんな能力が使えるのか見ていく。

(ん? 魔力付与? なるほどな・・・俺の火属性の一部をスラツシユへ移動)

スラツシユは火炎の息を覚えた。

(なら氷に風ならどうだ?)

スラツシユは氷の息に癒しの風を覚えた。

「・・・・・・・・まあスラツシユ試しに火炎の息!!」

『ぴきーーーー!!』

スラツシユの口から火炎放射が発生をしてターゲットにしていた木が燃えている。俺は水の魔法を使いすぐに消化をしたことで火災にはならなかつた。

まあこれでスラツシユも戦えるな。

「さーて出発をするとしよう、頼むぜ? ホクテルス」

『ひひーん!!』

俺は馬であるホルテルスに声をかけて俺たちは馬車を動かしている、スラツシユは俺の肩が固定位置になつていてみたいで、たまに水の癒しを放ち俺たちの水分を回復させてくれている。

「すごいですねスラツシユ。」

「ああ俺も驚いているよ、水分が回復していくからな。ありがとうなスラツシユ。」

『ぴきー!!』

スラツシユがいつもと違った声を荒げて、俺とセレーヌは馬車を止めて俺は今度は槍を生成をして雷の魔法で作りだした雷神の槍を構えている。

セレーヌは杖を構えてスラツシユはやつぱり俺の肩にいた、俺は強化魔法を使い視力などをあげている。

「どうですか？」

「・・・誰かが襲われている人？耳がとがっているな・・・」

「それはエルフですね、ですがどうしてこんなところに・・・」

「とにかく急ごう、集団ゴブリンならボスゴブリンがいるかも知れないからな。」

俺とセレーヌは走りだしてゴブリンたちがいた、その倒れている人物たちはおそらくゴブリンたちにやられたのだろう。

『ギギ、ニンゲン・マタキタ。』

『ヤレ!!』

『『ゲゲ!!』

おそらく奴がボスゴブリンだろうな、俺は雷神の槍を構えて上に上げていた。

『雷鳴よ!!』

雷が発生をしてゴブリンたちだけに当たるように攻撃をしてゴブリンたちは倒れていく、セレーヌは水の魔法を使い大きな連続した水の弾が勢いよく放たれて行きゴブリンたちを倒していく。

スラツシユは体当たりをしながら火炎放射を回転をして燃え盛るスライムタイフーンとでもなのつておこう。を放ちゴブリンたちを倒していく。

『ツ・・・ツヨスギ!?』

『オノレ・・・ウオオオオオオオオオオ!!』

ボスゴブリンが持っている盾と剣を構えて攻撃をしてきた、俺は回避をして雷神の槍に雷を纏わせてから放つていき、盾に命中させるが。

『ギギ!?』

奴が武器を離したすきを逃さないで奴のおなかに雷神の槍を貫か

せて撃破した。

『ゲゲ……ガハ!!』

ボスゴブリンが倒れたのを見てほかのゴブリンたちは逃げていくのを俺たちはほつておいても大丈夫だろうと思い三人のエルフたちのところへ行く。

「大丈夫かい？」

「「…………」」

彼女たちは何かにおびえているが、俺は首の方を見るとなにかがつけられているのが確認できた。

「これは……ラウルさま彼女たちは奴隸でござります、おそらく売るためにここまで来たのでしょう。」

「なるほどな。光よ。」

俺は光を手に集めてセイバーみたいに構える。

「「!!」」

「動くな!!」

おれは彼女たちの首へ軽く攻撃をして彼女たちがしていた首輪を破壊した、きわめてピンポイント攻撃だったのを滑らないようにしたが……成功をしたみたいだな。

『ぴき!!ぴきー!!』

「スラツシユ、悪いが癒しの風を使って彼女たちの傷を治してくれ。」

『ぴきー!!』

スラツシユは癒しの風を放つ、エルフたちの傷は回復をした。真ん中にいたエルフであろう長い髪をした女性が俺に話しかけてきた。  
「あ……あの……助けていただいてありがとうございます……私はアルフといいます、こっちにいるのはナラとサラと申します。」

「俺はラウル・ランページ、こつちはセレーヌにスライムのスラツシユだ。」

「セレーヌです。」

『ぴきー!!』

「それで君達はどうしてこんなところで?」

「……私たちは奴隸としてここまでつれてこられました、ですがその

連れてきた人物たちはゴブリンたちに殺されてしまい私たちも両手などがふさがっていたので武器を持つて戦うことができなかつたのです。そこにあなた様たちが倒されていつたので・・ありがとうございます。」

「気にしないでくれ、スラッシュユが何かを見つけたかのように俺たちを導いてくれたからな、ありがとうなスラッシュユ。」

『ぴきー!!ぴきー!!』

俺に褒められたのかスラッシュユはとても喜び俺の頭の上に移動をした。さてこのエルフたちをどうするかな。

「ん？」

俺の契約魔法が光りだしして彼女たちめがけて放たれる、三人のエルフたち当たり俺の左手が再び光りだした。

「これは・・・・・」

俺はエルフたちのステータスを見ている、アルフは魔法系が得意でナラが剣、サラは弓が得意のエルフみたいだ。

まさか俺の意思と関係なく契約魔法がされるとは思つてもなかつたがな。

「力が湧いてきます・・・・・」

「なによこれ・・・・・」

「いつもと全然違う・・・・・ラウルさま。」

「えつとはい・・・・・」

突然として三人は膝をついてきたので俺は驚いているが、彼女たちは何かを決意をしたのか俺に顔をあげて見てている。その目は真剣だつたので俺とセレーヌとスラッシュユは黙つて彼女たちの言葉を待つていた。

「ラウルさま、私たちはこれからあなた様の手となり足となりましょう。」

「我らエルフ族は決まつた主人には最後まで仕えるという使命があります。」

「どうか・・私たちをあなたさまの旅にお連れください。」「お願いします!!」

俺は二人の様子を見ている、二人も首を縦に振っているがスラッシュお前に首はないからたぶんいいだろうということで俺は彼女たちも方を向いて話す。

「わかつた、アルフ、サラにナラともに行こう。といつても俺たち旅の目的はないけどな。」

「ラウルさまは魔王討伐に出られているとかではないのですか？」

「魔王？」

俺ははじめて聞いた単語をちらりとセレーヌの方を向いていた、彼女はそんな話をしたことがないのを思い出した。

「確かに魔王はいますけど討伐という話は私たちの国イスカンダルでは聞かないわね。」

セレーヌも王様もそんな話はしてなかつたな、俺はアルフたちに詳しく聞くことにした、どうやらここから離れた場所にある王国で転移魔法をつかつて勇者を転移させてきたようだ、それで勇者は四人の仲間と一緒に魔王を倒すために旅だつたということらしい。

「なるほどな・・・といつても俺は魔王討伐に興味はないからな・・・だがもし俺の仲間とかに手を出すつていうのなら・・・」

俺は静かに怒りを募らせていき力を発揮させる。

「その時は全力で倒すのみだ。さてこんなところで時間を食うわけにはいかないからな、全員馬車に乗りこんで次の街へ行くぞ！」

「「「はい!!」」

『びきーーー!!』

エルフのアルフ、ナラ、サラが仲間になつた。

「さて次の街へ」

「「「出発です!!」」

『びきー!!』

## 長老のお願い

ラウルたち一行は新たにエルフの三人を仲間に加えて現在は森の中で野宿をしていた、スラツシユが火炎の息を放ちたき火の炎をしてご飯を作っていた。

「ほら完成をしたぞ。」

料理をしていたのはラウルだった、彼らはご飯を頂いて全員がたき火を周りで団まつていた。

「暖かいですねラウルさま。」

「とりあえずスラツシユ念のために辺りの見張りを頼む。」

『ききー!!』

スラツシユは光りだすと分裂を始めて拡散をしていく。スラツシユは分裂能力を持ちラウルたちが眠っている時に見張りをするほどに成長をしていた。

エルフのアルフたちも彼がゆっくりと眠れるようにスラツシユと一緒に見張りをする時もある。

次の日 ラウルはちらつと辺りを確認をしてからテントをしまつて全員が準備をしてパトリシアに餌を与えてから出発準備をしている。

「全員お疲れ様。さて先に進むとしよう。スラツシユ。」

『ぴきー!!』

スラツシユはラウルの頭にちょこんと乗ると、アルフたちが乗りこんだのを確認をした後に出発をする。

「アルフ、この辺は見張りをしていてどうだつた？」

「はい、スラツシユ殿が分裂をしてくれたのですが敵はゴブリンなどが辺りにうろついていたそうです。後はウルフに夜型のバットンなどがうろちょろしている感じでした。」

「ふーむ、念のために武器を作つておいてよかつたが・・・」

『ぴきー!!』

スラツシユが声をあげたので前方を見ると、山賊らしい人物たちがラウルたちの馬車の前を通せんぼをしていた。

(うわーめつちやめんどくさい奴やん。)

ラウルは苦笑いをしていると山賊の一人がこちらに歩いてきた、ラウルは降りてスラッシュユは頭の上に乗ったままであるが、気にせずに話をすることにした。

「おうおう兄ちゃんよ、ここは俺たちクマゴロウ軍団の範囲と知つてここを通ろうとしているのか？」

「いや知らないし・・・めんどくさいんで先に通らせてもらつてもよろしいですか？」

「そんなわけいかないだろが!!野郎ども!!」

「「おおおおおおおおおおお!!」」

山賊たちは武器を構えてきてラウルたちに襲い掛かってきたが、彼はため息をして手に光の魔法を出していた、アルフたちも攻撃をしようとしたがラウルに止められる。

「ここは任せろつて・・光よ・・弾丸の如く相手に攻撃をしろ!!シャイニングシユーティング!!」

上空へ光の玉を投げつけると上空で爆発をして山賊たちに光の雨が命中をする。

「ほげ!!」

「あぐ!!」

「どあ!!」

山賊たちは攻撃を受けてダメージを与えていた、今回は退散させる目的のためラウルは魔力を収めており威力は死なない程度に抑えているため気絶をさせていく。

『ぴきーぴきー!!』

スラッシュユは山賊の頭の上でやつたぜというポーズをとつていてるのか、ラウルは山賊たちはおびえていた。

「覚えておけ!!」

山賊たちはそのまま走りだしていき、ラウルは何かをする。

「風よふけ・・・エアロイド。」

風が吹いて山賊たちはこけていく。彼らはそのまま村が見えてきたので行こうとしたが・・トラブルが発生をしているみたいだ。

「ラウルさま、何か村の方でトラブルが発生をしているみたいですよ？」

セレーヌは遠くが見える魔法を使い透しをしており、ラウルは創生魔法を使いある武器を作りだした。

「主さま。その武器は？」

「ああこれ？ マシンガンといつて遠くから相手を攻撃することが可能な武器だ・・・さてスラッシュ。」

『ぴきー!!』

スラッシュは彼の頭の上に乗ると、アルフたちも武器を構えている。

「セレーヌ、敵の様子は？」

「はい・・・現在村長という方でしようか？ その人が対応をつて！！」「どうした？」

「押されました。山賊たちが武器をとりだしています!!」

「わかった、セレーヌたちは後で追いついてくれ。スラッシュ!!」

『ぴきー!!』

「・・・ブースト」

彼は素早く移動をして山賊たちの前に現れる。

「てめえ・・・どこから現れた。」

ラウルは無言で右手に持っていたマシンガンを構えて彼らの手に攻撃をした。

『が!!』

「なんだその武器は!!」

「教えてあげませんよ、スラッシュ氷の息。」

『ぴきー!!』

スライムことスラッシュが降りてきて、山賊たちは笑っていた。

「なーんだスライムじやねーか!!」

「脅かしやがって!! そんなので俺たちがやられるとでも!!」

『ぴきいいいいいい!!』

スラッシュは氷の息を吹いた、山賊たちは何人かが氷漬けされる。

「な!! スライムが氷の息を!?」

「スラッシュ、火炎の息。」

『ぴきいいいいいいい!!』

さらに火炎の息を吐いて氷の息で凍らせた山賊たちは溶けていくが。

「「あちいいいいいいい!!」」

「おのれ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・

彼は威圧を出して山賊たちはすたこらさつさと逃げていく、彼はそのまま威圧を解除をして後ろを振り返る。

「大丈夫でしたか?」

「ああ旅人の人、本当にありがとうございます。」

「ラウルさま!!」

馬車が到着をしてセレーヌたちが降りてきた。

「お礼をさせていただきたいので私の家の方へと来ていただけませんか?」

彼らは村長の後に続いて村の方へと入つていくと煙などが見えてきた。

「村長、あの煙は温泉ですか?」

「さようです、さあさあここが私の家でございます。」

村長の家について、彼の案内でソファアームと座りお茶をもらう。「では改めまして、私はこの村で村長をさせてもらつております、カイルド・ケーヌスと申します、今日は山賊から我々を助けていただいて誠にありがとうございました。」

「いいえ気にしないでください、俺はラウル・ランページといいます、こつちは俺の仲間です。」

「セレーヌと申します。」

「アルフです。」

「サラです。」

「ナラと申します。」

『ぴきー!!』

「ほほうスライムも。この村はネルフ村というところであります、温泉が有

名な場所とも言われております。皆さまにはぜひうちの村の温泉を楽しんでもらえたらうれしいのでござります。」

「村長さん、あなたは何かを私たちに依頼をしたいそうですね?」

「何を言いますかラウル殿・・・」

彼は真剣な目で村長の方を見ていた、村長はすこしため息をしてから彼らの方を向いていた。

「ラウル殿には隠し事はできませんか・・・実はあなたたちに山賊たちの討伐をお願いをしようと思つておりまして・・・ですが・・奴らのボスは強いのです、名前はガルバン・・・奴はその剛腕を使って相手を殴り飛ばしてきて討伐をしてきた相手を倒してきたのです・・・私の村の若者たちも奴によつてどれくらいの人物が倒されてきたか・・・」

村長は悲しそうに顔を俯いていた、どれくらいの人物たちがガルバンによつて倒されていたのか・・・ラウルはしばらく考えていたが：すぐに答えを決める。

「わかりました、その依頼を受けます。」

「おおおおおお・・・ありがとうございます。」

彼の依頼を受けてから泊まつてから温泉を堪能をしていた。

「いい湯だなははーんつてか。」

ラウルは辺りを見ていた、何かがこつちを見ているのかなと思つてゐる。彼は見てゐる人物たちにターゲットマークを発動させて覗いてゐるのを見ていると腹が立つてきましたので魔法を使うことにした。「痺れてな、ライトニング。」

ターゲットをした上空で電撃魔法が放たれてライトニングが発動をして覗いている人物たちを痺れさせておいて彼はバインドを使用をする。

「スラッシュ後を頼むぜ？」

『ぴきー!!』

スラッシュはラウルの頭に乗つかつており彼から降りてライトニングで痺れさせた相手のところへと向かつていき分裂をして何かをしていくみたいだ。

ラウル slide

「やれやれ……温泉の中に入っているだけなのに襲うとしているとはな。」

俺はスラッシュュに後を頼んでゆっくりと温泉に入ることにした、今回使ったライトニング……威力は最低限に抑えているからな、ターゲットマークーにした人物に痺れさせる魔法だからな。

まあ本来のライトニングは相手に集めた電撃を放つ技だからもちろんモンスター相手なら手加減無用で倒すけどな。

そういうえば俺のレベルってどれくらいだろうか？ステータスつと「……相かわらずチートだな……ステータスなどを見ても……」そのまま俺は閉じておりスラッシュュがどうしているか確認をしようとすると、ああそういうえばスラッシュュは吸収をする能力を得ていたつけ？

まあ擬態などができるたら楽なんだけどな、女性だつたらうれしいのだがな。まあそんなことを言つてもしようがないので俺は温泉を上がりセレーヌたちがいる部屋へと到着をする。

「主さまおあがりになつたのですか？」

「ああ、お前たちもその様子だと気づいていたみたいだな？」

「はい、武器などがなかつたので私は魔法を使おうとしましたが……」

「いずれにしても山賊たちを討伐をしないことには変わりないな。明日になつたら向かうとしよう。その山賊たちが住んでいるという場所に。」

「「「「はい!!」」」

「ん？」

俺は声が五人いたのでもう一度確認することにした。

「セレーヌ」

「はい!!」

「アルフ」

「は!!」

「サラ」

「はい。」

「ナラ」

「はーい!!

「はー!!」

スラッシュと呼んだ方を見ると、そこには青い髪をした女性がそこにいた。俺たちは驚いている。

「先に心配せんとうし無した?」

彼女は困っているが、俺がせめて少しでも助ける状態だ。とりあえず名前を聞くことにした。

「えつとお嬢さんお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

スラツシユか、俺は彼女のステータスを見る。確かにスラツシユだ。なるほど人を吸収することで擬態能力を得たつてことか……まさか女性になるとは思つてもなかつたが……これでスライムの姿じやなくても街の中へ入ることが可能となつた。

俺たちは山賊たちの砦へ行くために眠ることにした。

## 山賊砦へ

ラウル side

俺たちは現在山賊がいるであろう場所へ到着をする、さて俺たちは現在何をしているかというと？

「スラッシュ、中の様子はどうだ？」

そうスラッシュの能力の一つ分裂能力を使つた中の様子をうかがつて いるところ、そこから俺たちは作戦を考えるのだ。

「そうですね、大きい人が一人おそらくこれが村長さんが言つていた人だと御もれます、そこから幹部であろう三人、手下が数百人いる感じですね。」

スラッシュは戻ってきた自分の分裂体を合体させて情報を吸収をしている。俺はセレーヌたちに相談をして中へ突入をすることにした。

俺は強化魔法を使い全員にかけており、俺は創生能力を使い弓を出していた、ソニックアローって鎧武か!!

まあこれならエネルギーの矢を放つことができるし、矢が必要ないからな。

「・・・・・・・・・・・・・・

俺たちはひょこつと中の様子をうかがつて いる、中ではお酒を飲んでいるのかわんちやかと騒いでいた、

「さてサラ、ここは一発頼む。」

「わかりました!!」

サラは呪文を唱えるために魔方陣を展開をしている、俺たちは様子をうかがいながら武器を構えている、サラが魔法を発動をした後はセレーヌはサラの護衛、俺たちが突入することになつて いる。

『放て!!ガイアフォース!!』

までまでまでそれつてデジモンの技だよね!!確かに強力だけど、まあいいや相手は驚いて いるし。俺は創生をしたソニックアローを引っ張るとエネルギーの矢が発生をして手下たちを倒していく。

「主さまが使う武器、楽ですね?」

アルフは持っている弓を見ながら言うので俺は彼女にソニツクアローを渡す。

「えええ!! 主さま!!」

「大丈夫だ、俺は武器なら作れるんでね!!」

俺はそう言いながら武器を創成をする。稻妻の剣を出して雷鳴を呼び相手をしひらせていく。

「「しひびびびびびびびびび!!」」

「せい!!」

セレーヌは俺が作った茨の鞭を使い相手を絡ませていくが・・・

「「いだだだだだだだだだ!!」」

茨だしね・・・さてアルフはソニツクアローで攻撃をしてナラは持つている槍で相手を攻撃をしてスラッシュは・・・

『ぴきー!!』

戻つて相手の顔に張りついていた、さて俺はボスさんと相手をするかな?

「てめえ・・・何のようだ。」

「通りすがりの旅人さ、悪い奴らを倒すためにやつてきた。」

「け・・・面白い冗談だ・・・おらあああああああああ!!」

ガルバンはその剛腕を俺にふるつてきた、確かに剛腕は強いが・・・スピードがない!!

「な!!」

(なるほど、奴の剛腕の威力がすごいな・・・俺の後ろの壁に穴が開くほどだ。かわせるほどのスピードを持っているということだ、だがそれでも彼に敗れるということは・・・どこかに伏兵がいるつてことだな。

(よし一か八か、この技を使ってみるか・・・)

「皆目をつぶれ!!」

「「「「！」」」

メンバーが閉じたのを確認をして俺は光の玉を出す。

「はじけろ!! ホーリー!!」

強力な光を放つホーリーを使い相手は全員が目をくらませている

が、俺は後ろを向いて創成をしたガシャコンマグナムをライフルモードにして連続した弾を放つ。

「が!!」

「ごふ!!」

「な!!」

「なーるほど、こいつらがあんたでも倒せなかつたら暗殺をさせるつてことだな。だがネタさえわかれば怖いものナッシング。」

俺は武器を創成をして腕部につけた、まあ相手は何をしているかわからないという顔だ。

「さてお互に殴り合おうじゃないか・・・・・」

「面白れえ・・・俺に剛腕で勝てると思ったか!!おらあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

俺が現在装備をしているのは電気を帶びたサンダーナックルという武器だ。これは俺が電気の魔法を使い開発をした武器で創成能力でいつでも出せるようにしていたものだ。

俺は右手に力の魔法を使い強化をして、ガルバンが俺に殴りかかってきたので回避をして。

「必殺!!サンダーブーストナツコウ!!」

「へぶうううううううううううううううううううううう!!」

相手が転がつていき壁に激突をする、やっぱりチートなんだな・・・俺つてと今更ながら思つたわ。

さて相手を捕まえておそらく捕らわれていたらう人たちを救出をして俺たちは村の方へと戻ってきた。

「ラウルさま!!ご無事でしたか!!」

「お父様!!」

「ナナミ!!無事だったのか!!ありがとうございます!!」

俺たちはそこから宴会へと流れていきお酒などを飲まされていた、まあ俺は現在お酒を飲んでも酔わないための力を使用をしているのでしかしさかこつちでもお酒を飲むことになるとはな・・・・・

数時間後

「飲み過ぎた・・・さすがに酔わないとはいえるだけ飲まされるとは

な・・・気持ちが悪いな・・・とりあえずリカバリー・・・」

リカバリーを使用をして俺は気持ち悪いのを解除をする、なんとか

樂になつたので俺は次の場所をどうしようか考える。

とりあえず村を出るのは確定としてどこへ向かうか考えている、まあこの旅は別に勇者みたいに魔王を倒すつてのは興味ないからな。「まあ気まぐれに旅をしていくだけだ。」

こうして俺たちは村を旅たちパトリシアに乗りこんで移動をするのであつた。

## 洞窟へ

ラウル side

俺たちは次の街へと向かうためにパトリシアの走らせていた、セレーヌたちは武器の手入れをスラッシュは現在はスライム状態へと戻り俺の頭にパイルダーオンをしている。

「さて今日はここで野宿しますか、パトリシアここで停止だ。だいぶ暗くなってきたからな。さて結界。」

俺は結界を張り木の枝を出してファイアーアーを使いたき火を出す、女性人たちが飯の用意をしている。

「とりあえず次の街までまだ距離があるな。」

「そうですね、ラウルさまとりあえずどうしますか？」

「ん・・そうだな。一応次の街がでかかつたらそこでしばらく滞在をして稼ぐとしますかの前に、ちょっと覗いてみるかな？」

俺は結界の内側から見えるようにしていると、冒険者かもしれないが数十人が通過をしている、武器も構えている。

「マスター、おそらくなんですけどこの先に洞窟があつたのを思い出しました、確かあそこには何かがいた気がしますが・・・」

「わかった、明日そこへ向かってみよう。」

俺たちは今日のところは休んで次の日に向かうこととした。  
次の日

「ふああああああああああああああああ!!」

俺は大あくびをして目を覚ました、目覚ましなどがないから普通に起きたが・・・まだ暗かった。

「・・・つてことはまだ朝方か・・・太陽が出ていないとみると。俺は魔物たちが近くにいると思い構えているが、結界を張っているから入つてこないことを忘れていた。

「とりあえず素振りをしておくか。創成」

俺は武器を作り素振りをして数分後、全員が起きてきたので進むことにした。

「ゞ主人様、あそこあそこ!!」

スラツシユが指をさしているのでその方向を見る、あれはスラツシユが言つていた洞窟だな？」

「よしどりあえず今日は洞窟の方へと行つてみるか。あそこで俺たちの力を試すとしよう。」

俺たちはパトリシアを止めて結界を張り奪われないようにする、俺たちは武器を構えて洞窟の方へと入つていく。

「暗いな・・・ライト。」

明るくさせる魔法で俺たちはあたりを明るくして俺たちは歩いていき洞窟の中を歩いていく、魔物たちも襲い掛かつてきたが、セレーヌの魔法やアルフと矢を攻撃をして魔物たちは倒してくれる。

さらにサラは剣を構えて、ナラも魔法で援護をしている。

俺は・・・出番がない。ガンブレードを構えているがセレーヌたちが頑張つておるおかげで出番が少ないのだ。

とりあえずガンブレードの弾を補充をして出てきた魔物にシュートを放ち連続した弾を放つていき魔物たちを次々に倒していく。

「ん?」

俺は違和感を感じて上方を見ると誰かがこちらに構えていた。敵は降りてきて槍をふるつてきた。

「ご主人様!!」

「・・・・・・・・・・・・・・

そいつの姿は人の姿をしているのにとんでもない魔力値だ。俺はガンブレードをブレードモードにして構えておりお互いにダツシユをして武器がぶつかり合う。

相手は槍を使つて俺のガンブレードの斬撃を返しているが、俺は連續して攻撃をする。

「お前・・・強い・・・だけど私・・・負けない。」

「・・・・・・・・・・・・・・

俺は足に強化魔法をかけて相手に蹴りを入れて攻撃をする。

「ぐ!!」

(女?)

俺は戦いながら思つたが、気のせいだと思つていたが声を聞いて女

性だとわかる。だが彼女のこの魔力は……  
「仕方がない……」

彼女は槍を地面に刺して魔法陣が形成される、そこから魔物たちが発生をする。

「あれは……主!!」

「スラッシュ!!」

「えい!!」

スラッシュは人間の姿のまま激しい炎をはいて彼女が呼びだした魔物たちを次々に燃やしていき俺は一気に接近をして武器を次々に創成をしていき魔物たちに次々に刺していく。

さらに創成をしてチエーンがついた鎌を構えて彼女の持っている槍とぶつかるが、チエーンが回転をして一気に彼女の槍を削っていく。

「ぐ!!」

「これで終わりだ!!ライトニングファイスト!!」

電撃をこもった拳で彼女を吹き飛ばす。そのまま接近をして彼女を拘束をして俺たちは構え直す。

彼女がいつでも起きてもいいように全員で見張っている。

「…………」

数分後、俺の攻撃を受けてもすぐに起きるほどに彼女は回復をしているが……俺たちのことを見ている。

「……やはり……お前たちで間違いない、最近強い勢力がいると聞いた。それがお前たち。」

俺たちはそんな話を聞いて驚いている、魔物たちじや俺たちって恐れられているの!? 勇者じゃないの!?

「……勇者……そういえばそんな奴もいた……だけどお前たちの方が……強いと思う。なにせ、私を契約魔法を使っているぐらいだ。」

「!!」

俺は左手を見ていると契約魔法が光っている、こいつのステータスがわかつた。

彼女の名前はアステラスという名前だった、彼女は先ほどの召喚以

外にも持っている槍を使った攻撃が得意で主に炎を使った攻撃が得意と書かれていた。

まさかのここで新たな仲間が加わるとはね・・・とりあえず俺たちは洞窟の奥へと進むのであつた。

## ラウル対グラエキス

新たな仲間アルティヤを入れてラウル一行は先の方へと進んでいた、洞窟の中にいる魔物たちはラウルが作つたマシンガンが役に立ち連射をして次々に倒していく。

スラッシュユはスライム状態になり灼熱の息を放ち魔物たちを次々に撃破していく。エルフの三人も得意の武器で魔物たちを倒していく中、ラウルたちは走つていき洞窟の奥へと進んでいく。

「あなたさま!!」

「!!」

セレーヌの言葉に彼は魔法で盾を出してガードをした。だが衝撃を吸収できなかつたので後ろに下がってしまう。

「ほう・・我が一撃を耐えたのか?」

全員が声をした方を見ると右手に槍持ち、左手には大きな盾を持った鎧を装着をしている人物が現れる。

「・・・グラエキス・・・」

「ほーうアルティヤ・・・おぬしが負けていたとはな・・・なるほど・・・そこの人物か?」

「そのとおりだ、奴は私の予想以上の力を持つていてる・・・それに私は契約魔法をかけられている。」

アルティヤは左手に契約魔法の証をだしてから、ラウルは立ちあがり首がごきごきと鳴らしている。

彼はガンブレードを構えている。

「なるほど、あんたがこここの門番つて奴かい?」

「さよう・・・こここの宝を守り続けてきたからな・・・だがおぬしはほかの奴らに比べたら欲があんまりなさそうじやの・・・まあよい・・・我は強き相手を待つていただけだ!!」

グラエキスは槍を振り回して、襲い掛かつてきた。ラウルはその槍を回避をしてガンブレードのトリガーを引いて弾を放つ、グラエキスは持つていてる盾でラウルが放つたガンブレードの弾をガードをする。ラウルはそのまま接近をしてガンブレードの刃でグラエキスに攻

撃をするが、彼は持っている槍で彼が放つ斬撃をガードをしている。

そのまま持っている左手の盾で彼に攻撃をしてラウルは吹き飛ばされるがすぐに態勢を立て直して左手にマシンガンを持ち連射をする。

「ぬ！」

グラエキスは槍を振り回してラウルが放ったマシンガンの弾を地面に落ちていく、彼は斧を出してそれを投げつける。

「そんな斧で!!」

彼は斧をはじかせるが、その斧が再び彼に向かつて移動をしていた。

「ぬ!!」

グラエキスは先ほどと同じように斧をはじかせるが次々にグラエキスに斧がせまつてきている。

これこそラウルが特典の一つ、武器生成能力で斧を次々に生成をしてワイヤー糸を使い斧を操りグラエキスで攻撃をする。

「ぬ!!」

グラエキスは槍ではじかせて斧などがはじかせていくが、そこにラウルが接近をしていた。

「ぬ!!」

「くらいな!!フレイムナックル!!」

炎の拳でグラエキスに攻撃をするが、彼は左手の盾を使いガードをするが・・・ラウルは剛腕の強化魔法を使い威力をあげてグラエキスを吹き飛ばす。

「ぐお!!」

盾を殴り飛ばしてグラエキスは吹き飛んで行く、彼はそのまま武器を生成をして槍を構えて突撃をしていきグラエキスへ攻撃をするが・・・なんと彼は槍で受け止めた。

「!!」

ラウルが放つた攻撃をグラエキスは自身が持っている槍で受け止めていた、そのあとに彼は立ちあがると笑いだした。

「はつはつはつはつは!!気にいったわい!!少年!!貴様名前は?」

「ラウル・・・ラウル・ランページだ!!」

「手を出せ——い!!」

彼は左手を出すと、グラエキスは光りだして契約魔法が完成をした。

「これは・・・・」

「私は貴様を気に入つた!! 我が剣は貴様と共に行くとしよう。そしてこれが!! 我が守ってきた剣と鎧と盾だ。」

そこには真っ黒の剣と盾と鎧などを装着をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は腕などを動かしているが・・・異常がないことに驚いている。

「ほう・・・それは魔族などが着るものなのだが、驚いたわい。」

全員が驚いているが、ラウルは気にせずに鎧を着たままにしていたのであつた。

## 勇者を見る

ラウル side

俺は新たな仲間にアルティヤとグラエキスという仲間を得て、新たに漆黒の鎧と盾と剣を手に入れた。

普段は装備をしないで創生した武器で戦っている、グラエキスの武器などは強力で俺たちもオーというほどだ。

「はつはつはつは!!若い者たちには負けんわい!!」

アルティヤは魔物召還をしてそれを制御をする力を持っているのでこちらもすごいなと思い俺は創生をしたマシンガンで追撃をする。「ほほーう主殿はそう言う武器とかを作れるのじやな、わしらにも武器つてのは作れるかの?」

グラエキスが言うのでどういう武器がいいのかと聞く。

「わしの槍はボロボロになつてきたからの・・・そうじやな・・・こういう武器が同じのがあればの・・・」

俺は彼の槍を見て、それと同じようなものを創成をする。彼はそれを受け取り振り回している。

「驚いたのじや・・わしが使つている槍と同じくらいの重さじや・・・さすが主殿じや。」

さて俺たちはそんなこんなで街へ到着をして宿へ泊つて、俺とグラエキスが同じ部屋、セレーヌとアルティヤが同じ部屋となつておりエルフの三人が一緒である。スラッシュは俺たちと同じ部屋でスライム形態になつてている。

街はなんだか騒がしいなと思い俺は外を見ていると、男性の声が聞こえてきた。

「勇者さまが!?

街は勇者がやつてきたというのでうるさくなつてきた。

「勇者か・・・・・」

「グラエキスどうした?」

「いいえ。ただ人間はこうも勇者という単語が好きじやなと思つて

な。わしらにとつては勇者などただの一人の人間と思つてゐるから  
の・・・まあ主殿は別じやがな・・・」

スラツシユも同じ理由のかびきーと言つてゐる。やがてセレー  
ヌたちも俺たちの部屋の方へとやつてきて全員で窓の方を見つ  
て、勇者と思われる男性がやつてきた。その後ろには戦士である男  
性。魔法使いの女性、僧侶の女性と思われる人物だ。

「あれが・・・勇者ですか・・・ラウルさまに比べたら全然つて感じ  
ですね。」

セレーヌが一言そう言う、そのほかのメンバーたちも辛口コメント  
が多いなと思いながら俺は窓の方を見つてゐる、まあ勇者などどうでも  
いいし。魔王とかの関係はあつちに任せるとしようかな?

俺にとつては今的生活が好きでな、あんな勇者みたいに使命に苦し  
むのは絶対に嫌だと思つてゐる。

さて俺たちは次の日に街を出ることにした、俺は創生をした銃を構  
えており弾丸を込めてゐる。

セレーヌたちには回復薬などを買つてきてもらいに街へ買い物し  
に行つてゐる。隣でグラエキスは槍を磨いてゐる。

スラツシユはぴきーといいながら俺の頭の上に乗つてゐる。ス  
ラツシユは俺の頭が気にいつてゐるのか毎回スライム形態に戻り俺  
の頭の上に乗つてゐる。

「ほほースラツシユ殿は主の頭が気にいつてゐるみたいですね?」

「ああ最初に仲間にしてからずつと俺の頭の上が気にいつてゐるみたい  
でな。俺もそこまで気にしてないからな。」

俺はそういうて銃を空間へとしまい、セレーヌたちが戻つてきた。  
「ただいま戻りました。」

「ふう・・・疲れました。」

「お疲れ様じやな、アルティヤどうじやつた?」

グラエキスはアルティヤに街の様子を聞くために話しかける。

「ええ街は勇者がやつてきたということで盛り上がりつてゐるわね、と  
りあえず回復薬などは買えたわよ。」

「よしさつさと街を出るとしよう、全く・こつちはゆつくりと過ごし

たいだけなのにさ。」

そういうつて俺たちは馬車の方へと移動をして次の街へと向かうこととした、

## 噂の場所へ

ラウル side

なんか久しぶりだな……まあ小説を書いているこここの主が思いつかなかつたつてのもあるけどな？

さて久しぶり過ぎて俺はとりあえず両手や両足を動かしていた。

『ぴきー？』

「何でもないよスラッシュ。ただ体を動かしたいだけだから。それよりも……さつきから動かないんだけど？」

そう先ほどから俺達の馬車はほかの馬車と同じく動けない状態だ……しようがない俺は強化した両目で遠くの場所を見ていた。

「…………どうですか？ 旦那様？」

「…………あーどうやら閑所が封鎖されて動けないみたいだ……だが原因がわからないと意味がない。さてどうしたものか……」「主さま、この先が行けないと次の場所に行くことができませんからね…………」

「ああそのとおりだ。スラッシュ悪いがなんで通れないのか透明化で調べてくれないか？」

するとぽんとスラッシュが人間形態になり着地をしてこちらに振り向いた。

「了解っす!! スラッシュにお任せニンニン!!」

スラッシュが透明化となりグラエキスは槍を磨いていた。数分後スラッシュが戻ってきた。

「どうやら魔物たちがどこかで集まっているみたいで勇者たちが現在討伐氏に向かつたとのことです。」

「なるほど……仕方がないセレースたち俺達もその洞窟へと向かおう。あいつらのレベルからしたら遅すぎるからな。」

「ふふふそうですね? では。」

「ああパトリシア目標変えてくれるか?」

『ヒヒ——ン!!』

パトリシアは方角を変えて俺達は魔物たちがいるといわれる場所へと向かつた。

ラウル side 終了

ラウルたちは洞窟の入り口に到着をした。彼は創生をして武器をガンブレードを装備をして馬車から降りたつ。

ほかのみんなも準備が完了をしていざ中へと投入をする。

アステラスは待つてといい耳を澄ましていた。

「…………間違いない。ここにはたくさん魔物たちがいる。主気を付けて。」

「ありがとうアステラス。」

彼はアステラスの頭を撫でると彼女はえへへと笑顔で笑う。

ほかのみんなからしたら羨ましいと思つてゐるがスラッシュユは彼の頭の上でいつも通りに乗つており辺りを警戒をしている。すると前からコウモリ型の魔物たちが襲い掛かってきた。

「キラーバットじやなわしに任せい!!ダークネストルネード!!

黒い竜巻を発生させてグラエキスの魔法がキラーバットたちを攻撃をして撃破していく。

サラは剣を使い次々に切つていきナラは呪文を唱える。

「ブリザード!!」

強烈な吹雪がキラーバットたちに命中して撃破する。セレーヌも光の魔法シャインで撃破していく中ラウルは・・・・・・

「出番が待たないよ・・・・・・とほほほほ。」

仲間たちが倒していくので自分の出番がないかなと思つてゐると後ろからイノシシ型の魔物が槍を持ちこちらに突っ込んできた。

「主お任せ。いでよゴーレムちゃん!!」

『ぐおおおおおお!!』

ゴーレムが現れてイノシシ型のモンスター『イノブー』を殴り飛ばした。

「・・・・・・スラッシュユ火炎の息。」  
『ぴきーーー!!』

スラッシュユの口から火炎の息が放たれて魔物たちを燃やしていき

ラウルは出番がないなーと思ひながらスラッシュが再び頭の上にドッキングする。

彼らは先に進んでいくとわかれ道がある。

「ならここはこの魔物を出しましよう。出ろ!!」

アステラスは呪文を唱えると一体の魔物が出てきた。

「こいつは?」

「は、こいつは重要な方角などがわかる魔物として名前は「ビヨーン」という名前です。」

「び、ビヨーンね・・・・・・」

何て言ひる名前なんだと思ひながらビヨーンはビーンと伸ばしてい  
る。

「左の穴にどうやら強力な敵がいるみたいですね?」

「それもわかるんだすげー・・・・・・」

「ビヨーン!」苦勞様です。」

『ビヨーン——ン!!』

ビヨーンは魔法陣の中へと消えてラウルたちも先の方へと向か  
うとグラエキスたちは武器を構える。

「主よきをつけーい、どうやら迎えてくれるみたいじゃぞ?」

「へえ・・・・・・」

ラウルも先ほどから謎の力を感じていた。だからこそガンブレードを構えている。そして彼らが階段を降りたちまつっていたのは。黒き龍だつた。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「ダークドラゴン!?」

「馬鹿なやつがなぜここに!!」

「ダークドラゴン?」

ラウルは黒い龍を見て強そうと思つたがグラエキスたちがすぐ驚いているのが不思議あつた。

「ダークドラゴンは通常は闇の・・・・・・言えば魔法が住んでいる附近にいるものです。だからこんなところにダークドラゴンがいるなんてありあえません。」

「だがこいつがいるつてことは倒せばいいんじゃないか？俺たちなら  
いける！！」

「はつはつはつはつは！！そ、うじやな主が言、うなら間違、いないわい！！」

「作戦はセレーヌとナラは援護魔法を頼むその間に俺とグラエキスが  
接近をしていく。サラはこれを受け取れ。」

「マシンガンですか？」

「ああ援護は任せたぞ！！」

「サポートをします。「疾風!!」

アステラスは疾風という魔法で二人のスピードを上げる。

「さーしていくぞ！！」

「了解じゃ！！」

ダークドラゴンは口に漆黒の火炎を放ってきた。二人は回避をしてグラキエルは槍でダークドラゴンに攻撃をするが腕でガードされる。

「なんと主が作ってくれた武器が効いていない？」

「は！」

ラウルはガンブレードを銃モードに変えてトリガーを引き弾を発射させる。ダークドラゴンは腕でガードをした。

「堅いと来たか・・・・なら龍なら龍に対応する武器で倒す！！」

左手に現れたのはドラゴンキラーと呼ばれる武器だ。彼はダークドラゴンに攻撃をしようとしたが・・・・

「・・・・・・・・」

武器を降ろした。

「主？」

全員が突然としてラウルが武器を降ろしたのでいつたいどうしたのかと見る。

「戦いはやめる。」

「「「え？」」」

「見ろよ。」

ラウルが指をさした方角を見ると小さいダークドラゴンがいた。

「これつてもしかして・・・・・・」

「おそらくダークドラゴンはここで子供を育てようとしたんだ。それで侵入者たちを追い払っているがどうやら彼らはここで静かに過ごしたいだけみたいだ。安心をしろダークドラゴン俺達はお前たちの住処を荒らしたりしないさ。」

『……………そうか。』

「なんとしゃべれるのか!!」

『…………いやしゃべれるのは私だけだ。お前は不思議なやつだ……普通は私を見たやつらは襲い掛かつてくるものばかりだ。だがお前は私が子供を守っていると知りすぐに武器を収めた。変な人間だな?』

「そうかもしねない。だがあなたを失った子どもたちはどうする気だ? それに必死にあなたを守ろうとしているのを見てあなたたちが静かに暮らしたいと思っているんだなど…………」

『……………』

「さて『待つてくれ』え?』

『…………私と契約をしないか? いや頼む……………』

「いつたいどういう吹き回しだい?』

『なにお前と一緒に楽しいと思つただけだ。それに子どもたちにも外でのことを学ばせるのはいいと思つてな。』

「…………まあ俺の旅は自由気ままにするのが目的だからな。魔王討伐は勇者に任せることさ。』

『お前らしい……………』

「ん?』

ラウルの左手の紋章が光りだしてダークドラゴンたちに命中をする。

「いたたたなんだ? つてことは!! 人間の体!?』

「ママどうなつてているの?』

「すげー人間の体になっちゃつた!!』

「旦那様すごいです!!』

「さすがご主人様だ!!』

「ふふふなるほど自由にこの姿や元の姿に戻れるみたいだ。これから

よろしく頼むよ旦那様（笑）

「ふあ!?」

黒い髪に胸はダイナマイト級のダークドラゴンだつた人にラウルは顔を真っ赤にしてしまうがほかのメンバーたちにとつては面白くない。

そしてダークドラゴンの二人の子どもは男の子と女の子になつているがラウルの両手に抱き付いていた。

『ぴきーーぴきーー!!』

スラッシュユがここは自分のというぐらいにラウルを包みこもうとしていたが二人の子どもたちは口からひのこなみの火炎を放つ。

「あつちいいいいいいいいいい!!」

二人の子どもたちの火炎を受けてラウルは攻撃を受けてしまう。

「こら一人とも!!」

「「ゞ」めんなさい・・・・・・」

「あー気にするな。」

ラウルはセレーヌの回復魔法で傷を癒してもらい馬車へと戻った。どうやら関所の方は開いており彼らは次の街へと向かうのであつた。

宿へ到着

ラウルたちは新たな仲間ダークドラゴン一家を仲間に加えて旅を続けていた。彼らは次の街『モルガラ』という街へ到着をして宿へ到着をした。

いやー疲れましたのーーー

まあしようがないさ だが新たな仲間を得れたからいいかもな?

シーラが見ているのは美絵魔洋にして人間の体を手に人間化したダークドラゴン親子だ。子どもたちは始めてみる街に目を光らせていた。

「ただいま戻りました。」

「おかえりアルフ達。」  
「そうですね。」  
「とりあえず今田は休むとしようか?」

彼らは体力などを回復させるために眠りについた。  
次の日 ラウルはダークドラゴンと子どもたちと一緒に街を探索

「探索探索」

彼の両手には彼女の子どもたちが抱き付いておりラウルも元気でいいなと思いながら一緒に歩いている。

「すみません主。」

「気にするなって仲間だからな。そういうえばお前たちの名前などを考  
えていなかつたな……」

「一  
テウルは男の子の方を見た

[?]

「俺アイクつて名前?」

「ああそうだ。そして君は・・・・・ルフレだ。」

「ルフレ？」

「そうだ。そして最後はあなたか・・・・・レシア・・・・・それ

があなたの名前だ。

「レシア……………ありがとうございます。」

「「ありがとう!!」

3人の笑顔を見てよかつたと思うラウルであつた。一方でグラキエルはアステラスと一緒に行動をしていた。

「そいいえばあなたは鎧を脱がないのですね？」

「まあわしは亡靈みたいなものじゃから。見ろアステラス。」

「…………勇者たちみたいですね？とりあえず隠れて様子を見ましょう。」

二人は勇者一行が到着をしたのを見て隠れて様子を見ることにした。

「ようやく次の街ですね。」

「だな。」

「疲れました。」

「宿で休みたいですね？」

「そのとおりだ。今日はここで泊まるとしましよう。」

勇者たちが移動をしたのを見てアステラスは召喚魔法を使い伝書モンスターを出してラウルの元へ飛ばした。

宿へと戻ったラウルたちは泊まっている部屋へ戻り窓を見ていると伝書モンスターがやってきた。

「アステラスが出したのか？どうしたんだ。ふむふむ勇者たちが・・・・・ありがとうな。」

伝書モンスターは伝えると姿を消す。

「主さま、勇者たちがこの街へ来ているのですか？」

「その通りですよ。スラッシュ悪いが人間態になつてくれ。『ぴきー!!』

スラッシュは光りだして人間態へとなり座る。

「ふう・・・・人間形態つて案外疲れるのです。」

「しかし主さまどうしますか？」

「あいつらのことは正直言つてどうでもいいさ。俺達は俺たちの旅をするだけだ。」

ラウルは正直言えればのんびりこの世界を堪能をしたいと思つているだけだ。だがそれでも彼の仲間に加えようとするなら戦う決意を

固めている。

その夜 ラウルたちは酒場でお酒を飲んでいた。

「上手いですね。」

「ああうまいな・・・・・・」

ラウルたちはお酒やつまみなどを飲んでいながら勇者たちも同じ場所で飲んでいた。ラウルは力で彼らがいるのがわかつてているのでもスルーすることにした。あんまり彼らとかかわるつもりはないからだ。

次の日 彼らは次の街へ行くために準備をしていて。パトリシアに準備をして次の街へと向かつて歩いていく。

その前に現れたのは魔物たちだつた。

「全くめんどくさいな・・・・・・」

ラウルは武器を創成をした。彼が創成をしたのはオーブスラッガーランスだ。彼はレバーを一回弾きオーブランサー・シユートが放たれてモンスターたちを撃破した。

「・・・・・・・・」

だが彼は別の場所にランサーを向けていた。

「さつきから見ているのがばれていますよ勇者さんたちよ。」

「ばれていますか。」

勇者たち四人が姿を現した。ラウルにとつてはめんどくさい奴らに絡まされたなど・・・・・・勇者たち一行は彼が持っている槍を見ていたがすぐにラウルは槍を消した。

「あなたはいつたい何者なのでしようか？スライムにエルフ・・・・・・そしてドラゴンのたちと一緒にいる。」

「ただの旅人さ。といつても見逃してくれないみたいだな。」

向こうは戦闘準備をしておりラウルも武器を創成をする。今ここに勇者一行対ラウル一行の戦いが始まろうとしていた。

## ラウル対勇者。

ラウル side

俺達は次の街へ行こうとしたときに魔物が現れた、俺は槍を生成をして現れた魔物を突き刺した。だがその様子を見ていた人物がいた勇者一行だつた。

まあ俺的にはまさかつけられていたとは思つてもいなかつたな。仕方がない・・・・戦うつもりはないが向こうはやる気みたいだな。

「グラエキスはあの戦士を頼む、アルフたちはあの魔導士たちを・・・・スラッシュはグラエキスを援護を頼む。レシアは子どもたちを守ってくれ。ただし相手を殺すなよいいな?」

「わかっているわい!!」

「ええその通りです。」

俺は剣を生成をして勇者と戦うために移動をする。彼は俺の動きに合わせて移動をして剣を抜いて襲い掛かる。

「ちい!!」

素早い剣技が俺に襲い掛かるはじかせているがなんとも速い攻撃をしてきている。このままじやまざいなと思い俺はピオラをかけて素早い動いて後ろへ下がつてガンブレードを生成をしてガンモードで勇者に攻撃をする。

「ツ！」

左手の盾で俺が放つた弾丸をガードをして接近をしてきた。俺はこのとき勇者のことを勘違いをしていた。

(こいつは努力型か・・・・なるほどな。)

俺はガンブレードをブレードモードで彼がふるつた剣をガードをしていく。

「風よ刃となつて相手を切れ!! ウィンドカッター!!」

俺は風の魔法ウインドカッターを発動させて勇者に攻撃をする。彼は魔法を使うとは思つてもいなかつたのか盾でウインドカッターをガードをしているがその隙に俺は後に回りこんでツインダガー

を構えて彼の首元につきつける。

「…………さすがダークドラゴンなどを仲間に加えているだけあるな。」

「あんたも…………ん？」

俺は聴力を強くして何かの音がこちらに近づいているのを感じた。ばきばきと木をなぎ倒していき現れたのは大きなモンスターだつた。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「なんでギガンテスが!!」

「ちい!!」

俺は棍棒を振り回すギガンテスに向かつて走つていき漆黒の剣を出して攻撃をする。これはグラエキスが守つていた漆黒の武器の一つで俺はそれを振るいギガンテスを切り裂いた。

「すごい…………」

「ちい後ろだ!!」

俺は走りだして後ろの現れた敵からあいつを守るために抱えて飛び立とうとしたが・・・・・・  
むにゅ。

「???

「??」

!!彼は顔を真っ赤にしているがつてまさか・・・・・俺は彼・・・・・いや彼女を降ろしてからもう一体の敵の方に向かつて魔法を唱える。  
「凍えろ! アイスクリスタル!!」

俺が放つアイスクリスタルがモンスターに命中をして魔物は凍り付いて俺は剣で叩き割つたが勇者は顔を真っ赤にしていた。

「…………お前女だつたのか・・・・・・」

「ええそうよ。私は女よ・・・・・性別を隠して男として活動をしていたのよ・・・・・まさかあなたにバレルなんてね。」

「まあ俺はどうでもいいし魔王との戦いはあんただちに任せる。」

「あなたはどうして戦わないの?」

「…………俺はのんびりと過ごしたいのさ、仲間たちと共にな……」

それが俺がこの世界でやつていくことさ。」

俺はそういう勇者たちとの戦いを終えてパトリシアに乗りこんで旅だった。全くいい迷惑だつたけどな。

「大丈夫かのラウルよ。」

「大丈夫だ問題ない。お前たちの方は大丈夫だつたか？」

「ええセレーヌさまの援護魔法で何とか戦うことができました。」

「わしの方もスラッシュの援護で戦っていたがあの戦士なかなかやるわい。」

「ぴきー!!」

スラッシュは癒しの波動を放つた。ラウルたちの体力などが回復した。

「ありがとうスラッシュ。」

俺は頭の上に乗つているスラッシュになでなでしてぴきーと鳴いて俺はセレーヌに次の場所を聞くことにした。

「セレーヌ次はどこに向かえばいいのかな?」

「そうですね。ここからですと水の街が近いですね。」

「ほう水の街とな。」

「ええそこは綺麗な噴水などが有名なのですよ。」

「それはぜひ行つてみたいとな。」

こうして俺達は次の目的場所を水の街に決めてそこへ向かうのであつた。

# 水の街にいたモンスター。

ラウル side

勇者たちと戦つた後俺達は馬車を水の街「スイレーン」へと進路を向けていた、セレーヌ曰くそこは綺麗な水の街と言われているらしく、観光客などが多く来ていると言っていた。

「ほうそんな水の街にわしらもいける日が来るとは思つてもいなかつたわい。」

「そうですね、私はあの子たちを守るために洞窟の中で過ごしていましたから・・・・」

グラエキスやレシアが言うがお前たちは俺の仲間だからな？死なせるわけにはいかないぜ・・・・さてそんな話をしながら街「スイレーン」に到着をした。

「これは・・・・」

「とても綺麗です!!」

アルフたちが噴水を見てうつとりとしているが確かにこれはとても綺麗な噴水で水の街といわれているだけあるな・・・・

「ん？」

「スラッシュどうした？」

「・・・・・・氣のせいだと思うのですが・・・・モンスターの匂いを感じました。」

「匂い？」

スラッシュの項目を見ると探査能力が増えていることに気づいた、いつのまに・・・・・とおりあえず奴は夜に活動を開始をするのかわからぬいため、俺とスラッシュは夜に出ることにした。

そして夜となりセレーヌたちは眠っているのを見てから俺とスラッシュは街に出る。

「スラッシュわかるか？」

「うーん大いたいだけどわかるよ？あの場所！」

そこには高い塔があり、街が見渡せるほどの高さだ。もしスラッシュの言う通りならモンスターは何かをしようとしているのは間違

いない。

「行くぞスラツシユ！」

「びきー!!」

スラツシユは俺の頭に乗り俺はダツシユをしていき塔の方へと向かう。

ラウル s i d e 終了

一方で塔の頂上にいるモンスター。名前は「エービルガウスト」という名前のボスモンスターだ。

「エービルガウストさま。間もなく準備が完了をします。」

「ご苦労、この石化をする雨を降らせて街の奴らを全滅させる作戦、ふつふつふこの俺じゃないと考えられないからな。さーーっすがエービルガウストさまだぐつはつはつはつは!! って俺じやん俺天才!!」

つとエービルガウストは自己自賛をしていると突然として光弾が放たれてモンスターが倒れる。

「何?!誰だ!!」

「まさか塔の頂上にモンスターがいるとは思つてもいなかつたわ。全くそういうのは優者たちの出番だろうが・・・・」

そこにいたのはラウルとスラツシユである。彼は銃剣を生成をして弾丸を放ち装置をいじつていたモンスターを倒してから着地をする。

「おのれたかが人間がこの俺エービルガウストさまに勝てると思ってるのか!! だが俺さまが出る必要はないな。行け!! 我がモンスターたち!!」

「「ぐおおおおおおおおおおおおおお!!」「」

エービルガウストの命令を受けてモンスターたちがラウルに襲い掛かろうとしたがスラツシユが前に立つ。

「ただのスライムじゃないか、気にせずに『スラツシユ灼熱の息』え?」「ぴきいいいいいいいいいいいい!!」

スラツシユの口から灼熱の炎が吐かれてモンスターたちを次々に焼いていきエービルガウストの放った部下たちはスラツシユ一匹に

倒される。

「な、なんだそのスライムは!?てかなんで灼熱の息が吹けるわけ!?」「さてどうする?お前の部下は倒されたみたいだけど?」

「おのれただの人間が俺様を怒らせたこと後悔をするがいい!!」

エービルガウストはラウルに突進をしてきた、彼は彼の頭部を踏んで上空へ飛ぶ。

「馬鹿め空では自由が効かないだろうが!!くらえ!!」

エービルガウストは呪文を唱えて火の弾を連続して放つが、ラウルは創成能力を発動させて背中に装着をするとエナジーウイングが発生をして回避をした。

「何!?

「ああああああああああああああああ!!」

そのまま剣を生成をして彼の左角を切断する。

「ぬお!?俺様の角を!?!」

「・・・・・・・・・・・・

彼はそのまま武器を生成をしてブリザードソードを生成をして地面に突き刺してエービルガウストの下半身を凍らせる。

「な、なんだこの冷気は・・・・・とかせないだと!?」

「さーてこれで終わりにしてやるさ・・・・・・・・・・・・

彼は生成をして銃を作つて構える。

「シューーティングバレット!!ファイア!!」

狼型のエネルギーが飛びエービルガウストに命中をしてダメージを与えていく。

「お、おのれ!!」

「もうおわりだよ?」

「な!!」

彼はマツハの能力を使いメイスを生成をしてそれを振り下ろしてエービルガウストの脳天を陥没させた。

そして氷が解けて彼はそのまま後ろの方へと倒れる。

「スラッシュユはどうだ?」

スラッシュユは人間形態へと姿を変えて確認をしている。

「死んでいるね？さつきのメイスの攻撃がどどめみたい。」

「さてとりあえずこんなもののブラックホール!!」

彼は小さめのブラックホールを作り機械を吸収させてブラックホールを消した。こうして密かにエービルガウストの作戦を潰したラウルとスラッシュであった。

だがその様子を見ている魔導士がいた。

「ほーう勇者以外にも我ら魔族と戦う人物がいたとはな・・・・だが奴は何者だ？私は長いこと生きてきたが・・・・奴はモンスターを仲間にしているみたいだな・・・・ならしばらくは様子を見るとしようかな？」

魔導士はそういうつて杖を使い魔法陣を出して変身をする。

次の日ラウルは一人で街を歩いていた。ふああああと欠伸をしながら街を探索をしていると彼は罠にかかるつている鳥を見つける。

それこそラウルを見ていた魔導士が変身をした鳥である。彼はそれを気にせずに罠を解放させると鳥は彼の肩にとまつた。

「おいおい。まあいいか・・・・旅をするメンバーが増えるつても。」

彼はそう言いながら肩に鳥を乗せながら彼らが待つていてる宿へと帰ってきた。

「「？」

「えっとマスター・・・・・・」

「どうした？」

「いやその鳥はどうしたのですか？」

「・・・・・ああ罠にかかっていたから助けた。」

「ほーう珍しい鳥じやの？新種かのーーーー？」

全員が鳥をじーっと見てていた。一方で鳥になつていてる魔導士は驚いている。

(なんでダークドラゴンに闇の鎧などを守つていてるグラエキスなどがいるのよ!?) いつは一体何者なんだ!?)

魔導士は驚きながらも鳥の姿で様子を見ることにした。

「さてセレーヌ次はどこに行く？」

「そうですね・・・・・」

(な!!こいつは確かセレーヌという姫だ。なんでこの男と一緒にいる  
んだ・・・・・この男一体何者なんだ!?)

こうして魔導士は彼らの様子を見るために加わるのであつた。

「そうだ名前はアイルスにするかな?」

(どうして私の名前がわかつたあああああああああああああああああ  
ああ!!)

ちなみにラウルは適当につけた名前だということであつた。

## アイルスの様子見

アイルス s i d e

私は今鳥の姿に変身をしてこの男ラウル・ランページたちの旅に同行をしていた。お姫様を中心にエルフに魔術師、ダークドラゴンにグラキエル……さらに召喚士にスライムなどの仲間が加わっている。

「…………」

「どうしたのですかラウルさま？」

「いや何でもない、何か知らないが誰かに見張られている感じがする。」

「見張られている？」

全員であちこちを見ているがまさかこの男が…………私のことを言っているのだろうか？この男油断ができない…………

「ぴき————」

「スラッシュどうした？」

「主はどうやら敵がでてきたようじゃ!!」

あれは確かこの辺のモンスターだな？確かに名前は「エビマテン」と「カニナイト」だつたかな？

「あれはエビマテンにカニナイト…………この辺のモンスターですね。」

「OKならこの武器だな？ソニックアロー」

ふあ!?武器を生成をする能力ですって!?

「さて主はどうするかの?」

「いつも通りだな…………」

「主さまここは私にお任せをしてもらつてもよろしいですか?」

「レシアア?」

「ダークドラゴンの力をお見せしましよう。はああああああああああああああ!!」

レシアアと呼ばれた女性はダークドラゴンへと変わりカニナイトたちは驚いている。そりやあそうでしょうね。ダークドラゴン自体は

だいたいは魔王さまの近くらへんに住んでいる生きものですからね  
それがこんなところで現れるなんて思つてもいなかつたでしようね  
？

しかもこの個体おそらく最近まで族を纏めていた人物で間違いない。  
女ドラゴンでありながら頂点にいたドラゴンがいた。ただ最近  
になつて行方不明になつてゐるとは聞いていたけど···

あ、口から灼熱の炎を出してカニナイトたちがこんがりやけてい  
く。美味そうじゆるり···は!!違う違う何を考えているのか  
しら?

「こんがり焼けましたね（笑）」

「ああそうだな。てか美味しいのか？」

「おうカニナイトは焼けばうまいからのーーーどーれ。」

グラキエルがカニナイトのはさみのぶぶんをぶちつと引きちぎる  
とそこにはこんがり焼けて いるために自身などが出ていた。

「どうしますか？こんなところで放置をしておきますと···

「うーむ今日はここで昼飯タイムとしますか。」

「そうじやのーーーー」

「では調理をいたしますね？つてレシアさんがもうほんとしたので  
ラウルさまお皿などは出せますか？」

「ちよちまつてくれ···ほれ。」

な!!皿まで作ることができなんて···つて彼は便利屋み  
たいなのね···つて見ると本当こいつを慕つて いるわねこの  
子たちは···エルフたちも彼に懐いて いるしつてスライムは  
変身をしてつて変身？

「マスター——むぎゅ———」

「スラッシュьюいきなり抱き付いてくるな···

なるほどこのスライムは人間を食べたことで変身ができるようにな  
るのね···つておかしいわね？そんなスライム聞いたこと  
がないわよ···とまあ見物をしているとラウルつて男が私  
のところへとやつてきてしゅたつと置いた。

「ほらお前も食べろよ？鳥の姿をしても食べれるだろうけど

さ・・・・・

・・・・・え？今なんて言つたのかしら？鳥の姿をしても  
食べれるだろうけどさ・・・・・つてもしかして私ばれている？  
「ん？どうした？」

・・・・・この男・・・・・本当に何者だろうか？

アイルス side 終了

ラウル side

さつきから鳥の方から何かを感じていたけどやつぱり変身をしている姿なんだなと俺は思っていた。なんでわかるかつて？魔力だよ・・・・・おそらく変身魔法を使つていてる影響かもしけないが魔力が放出されている感じがしたんだ。

鳥の方を見ると汗だくなっている気がするな・・・・・まあばれてないと思つていたけどばれているんだよなーーーほかの奴らも知つていたから黙つていたけど。

「お前バレバレだぞ？てか戻つたら？」

アイルスは観念をしたのか光りだして鳥の姿から魔法陣を発生させて人間の姿に戻つた。

「・・・・・お主はアイルスではないか。」

「グラキエル知り合い？」

「おう魔王軍の魔導士参謀をしていたやるじや。だがお主がなんでラウル殿の鳥になつていたのじや？」

「・・・・・気になつたからよ。」

「「気になつた？」」

「ぴきー？」

「そうよ魔王軍と戦う勇者以外にも戦つている人物をこの間のスイレーンでのこの方の戦いを見ていたのよ。」

「あーあの時感じた視線はお前だつたのかつてありや？」

そうしゃべつていると俺の左手の契約の印が光りだした。

「それって！？契約の印！？はう！！」

放された契約の印の光が彼女に当たり印の方を見るとアイルスつて名前が追加されていた。

「ほーうアイルスよかつたのーーーお主ラウル殿と契約されたぞ?」

「な!!」

彼女は左手を見るとそこには俺と同じ契約された証がつけられた。  
「まさか契約印をもつているなんて思つてもいなかつたわ・・・・・・  
なら仕方がないわ。このアイルス、あなたのために働くわよ?これで  
も魔法に関しては色々と覚えていられるからよろしく。」

魔法か・・・・確かに俺は創成を作る能力があるが魔法はセレー  
ヌがいるからな・・・・けどグラキエル曰く魔法で彼女に勝てる  
奴はおらんほどか・・・・って待てよ俺つて魔王軍の参謀を抜き  
取つた感じだよね?やばばばい・・・・

「はあ平和な生活が終わりそうかな?」

「主?」

「なんでもなーいよ。とりあえず次の街へと行きますかな・・・・  
はあ・・・・」

俺はため息をつきながら次の街へと向かっていく。何事もなけれ  
ばいいけどなーと思いつつ勇者たちはやく魔王倒せ。

奴隸の街

ラウル Sidel

グラエキスからアイルスのことを詳しく聞いた。彼女は魔王のところでは魔導士参謀と呼ばれている人物だということだ。…………うん俺まずくない？魔王軍の魔導士参謀を契約をしちやつたんだよね？

くしゅん!!

「これもご主人様の人望ってものですよ？」

セレーヌ、アルフ・・・・・・褒めてくれて いるけど今 の俺嬉しく  
ないんだよーーーーだつてよーく考えてみたらうちのメンバーつて  
姫、エルフ×3、スライム、闇騎士、召喚士、魔導士参謀、ダークド  
ラゴン×3という不思議なパーティだよ!?

「・・・・・そして俺か」

はあーとため息をつきながらバトリシアは次の街の方へと向かっていく。

「ご主人様、次の街は「パトレーラ」という街ですわ」

「パトレーラという街か……どういう街なんだ？」

「実は名前は知っているのですが……実際に行つたことはないのです。なにせここら辺からはイスカンダル王国の国ではなく「バラスト王国」の街でもあるのです。」

「スラッシュ、悪いが先に行つてくれないか？」

「わかりました！」

スラツシユは擬態化を解除をするとそのまま街の方へと向かつて  
いき俺達はパトリシアの中で待機をしているとアイルスは首をかし  
げていたので俺は声をかける。

「どうしたんだアイルス？」

「あ、主殿…………いえ。パトレーラという街の名前をどこかで聞いたことがあります……はて？」

「がつはつは！魔導士参謀殿も年ではないでしょうか（笑）」

「失礼な!!私はまだ若い!!」

グラエキスとアイルスが喧嘩をしているが俺は気にせずにスラッシュユが帰ってくるのを待つていると戻ってきて人間態になる。

「大変だよ！街にロボットが暴れていて街の人たちを襲っているの!!」

「なんだと!?急いでいかなければ!!」

パトリシアを走らせてパトレーラという街へと走らせると入り口付近で兵がロボット兵に切られているのを見て俺は武器を生成をしてパトリシアから飛びあがりロボットを切り裂いた。

ちなみに作つた武器は星獣剣である。ロボットはラウルに気づいて持つていて武器を構えた。

彼は左手に銃を生成をして構えると上空から雷が降り注いでロボットたちは機能停止をしたのでラウルは振り返るとサラが魔法を唱えたみたいで彼女は膝をついた。

「サラ大丈夫か？」

「はい……ですが魔力を消費をしてしまって「ほら」あ、ありがとうございますアステイヤさん。」

アルティヤが魔力を回復させる薬を飲ませてくれたのでサラは回復をして彼らは中へと入るとロボットが暴れておりラウルは指示を出す。

「俺とグラエキス、アルフとナラは突撃をする。レシアはここでスラッシュユたちと共に子どもたちを」

「ご主人様！俺達も！」

「駄目だ！行くぞ!!」

ラウルの言葉を聞いて分散をして彼は走つていくと子どもを襲おうとするロボットの右手を切断させてから頭部に銃をつきつけて発砲をして倒す。

「ふえ？」

「大丈夫か？」

「うん、お兄さんは？」

「俺は旅人だ。さてとりあえずターゲットロック……放て！ ライトニング！」

上空へと放たれたライトニングがターゲットをロックをしていたロボットたちに命中をして次々に機能が停止をしていく。

彼は救出をした女の子を連れて帰つてくるとグラエキスなども合流をする。

「流石主様じゃ！」

「ご主人様お見事です！」

グラエキスとアルフはラウルをほめているとほかのメンバーも合流をすると街の長の人物達が現れる。

「あの旅人の方々、助けていただいてありがとうございます。よかつたら私の家で泊まつてくれませんでしょうか？」

「…………」

ラウルはあまり関わりたくないが人々などが見ているので仕方がないとため息をつきながら長の家へとパーティと共に向かう。

中に入り長に座るように言われたので座つた。

「では改めまして私はこのパトレーラの長を務めております「パトリス」といいます。このたびは街を救つていただきありがとうございます。」

「す。」

「いいえ、ラウル・ランページといいます」

「セレーヌと申します。」

「セレーヌと言われますとあのイスカンダル王国のお姫様！ それがなぜこの街へ？」

「私は夫であるラウル様と旅をしているのです。」

「ふむラウル様は様々な人達に慕われているのですね。…………ラウル様旅人のあなたに頼むはいけないことなのですが…………お願いです！ ロボットたち操る魔物を倒してくれませんでしょうか！！」

「どういうことですか？」

「実はパトレーラを襲つたロボットは魔物「パンパース」と呼ばれるモノスターが操るものです。奴を倒さない限りロボットは暴れ続けるつてことなんです。」

「そういうことが……………」

最初に若い者たちが倒しに行きました  
ここにいるあなたが助けてくれた孫の父親も……」

で承諾をする。

「アリジーライアギー、無事！」

こうしてラウル達はロボット操る魔物「パンパース」を倒す為に街で一晩泊まってから次の日出るのであつた。

## 罠だらけの洞窟

村を襲っていたロボットたちを撃破したラウル達、彼らはロボットを操つていると思われるパンパースと呼ばれる魔物を倒す為に、奴らが住みかとしている洞窟の方へとやつてきた。

「ここが、パンパースと呼ばれる奴がいるところか。」

「パンパース・・・パンパース・・・・・・・・」

アイリスは、先ほどからパンパースと名前を呟いていたので知り合いかなと思いながら、ラウルはグラエキル、スラツシユ、レシアを連れて中に入ることにした。

ほかのメンバーは、念のために自分たちが何かあつた際に残つてもらうこととした。

「ご主人様、お気を付けください。」

「ああわかっている。なにがあるのかわからないからな。」

警戒をしながら進んでいき、グラエキルなどは辺りを見ていた。

「しかし、なんもない洞窟じやの？ 「カチ」 ん？ なんの音じや？」

「あ・・・・・・・・」

すると地面が開いてレシアはダークドラゴンの姿へと戻り、三人をつかんで反対側の方へと飛び着地をした。

「レシア、助かつたよ。」

「まさか、こんな洞窟に穴があるなんて思つてもいませんでしたね。」

「おのれ！ パンパースとかいう魔物をわしが成敗をしてくれるわい！」

「とりあえず、罠があることがわかつた。気を付けながら進んでいく。」

ラウルはそういう、先へ進んでいくとロボットが攻撃をしてきた。

ラウルは武器性せ能力を使いバズーカ砲を生成をして発射させた。

ロボットの一体に命中をして、グラエキルが飛びあがり槍でロボットの突き刺した。

「スラツシユさん！」

「はい！」

「ダークフレイム！」

「灼熱の息！」

二人が放った炎がロボットたちを溶かしていき、ラウルはブーメランを作り投げつけるとロボットたちを切り裂いた。

「対ロボット用に生成をしたメタルブーメランさ。つてく、こういうのは勇者たちの仕事だろうが。」

メタルブーメランを投げた後にそう咳きながらも襲い掛かってきたロボットの攻撃を交わすとライトニングを放ちロボットの一体を機能停止させた。

そして彼らは先の方へと進んでいき、グラエキルが扉を破壊して中に入ると、ロボットたちが一斉に襲い掛かってきた。

「ああああああああああああああ！！」

ラウルはメタルブーメランを投げてロボットたちは次々に切断されて破壊された。

「おのれえええ！私のロボットを破壊をしているのはお前だな！我が名はパンパースだああああああああ！行け！ロボットたち！」

「ご主人！こいつらの相手はわしらが務める！」

「あなたは、奴をお願いします！」

「わかった！」

スラッシュユダがロボットたちを引き受ける間に、パンパースへと向かうように言われてラウルは走りだした。

パンパースはラウルが来ているのに気づいてボタンを押すとビーム砲が現れて放ってきた。

「ミラー！」

現れた鏡がビーム砲を反射をして装置に命中をして爆発、そのまま接近をしてパンパースが乗っているマシンに剣を振り下ろした。

「どあ！」

パンパースは交わして後ろの方へと下がるとロボットたちが現れて襲い掛かってきた。ラウルはメタルブーメランを投げてロボットを撃破するが、一体のロボットが接近をして彼に切りかかろうとしたが、槍が胴体に命中をしてラウルは見るとグラエキルが投げつけたと

判断をしてそのままロボットの頭部を踏んで飛びあがり剣を生成をして振り下ろした。

「でああああああああああああああああああああああああああああああ！」

「ぐああ！」

パンパースが乗っていた機械事切り裂いて、爆発が起きてロボットたちは機能停止をした。

「なんじや？機能停止をしよつたわい！」

「ふう・・・さあ戻りましょう？子どもたちも待っていますしね？」

「そうそう、ご主人様———」

「ん？ああ戻るよ。」

ラウル達によつてパンパースの計画が崩されたのであつた。まさか勇者じやないものが魔王軍の計画を潰しているなんて知らないままであつた。